

翻訳

イマヌエル・カント — (身体) 教育に関する考察

ミヒャエル・クリューガーⁱ 著, 有賀 郁敏ⁱⁱ 訳

哲学者イマヌエル・カント (1724-1803) の生誕300周年は、彼の哲学が教育全般とりわけ身体教育 (体育) の理論と実践にどのような関連性があるのかを議論する機会である。本稿の第1節では、カントの著作が現在ドイツ国内外でどのように受け止められているかを概観する。第2節では、カントの著作『教育学講義』を取り上げる。第3節、第4節では啓蒙主義時代におけるカント哲学の始まりから、現代の体育・スポーツ教育学におけるカント哲学の受容について論じる。

キーワード：カント, 教育, 体育, 理性, 理性批判

1. カントと (身体) 教育

「君はカントを知ってるね。彼は片手で逆立ちができたんだ」。

これはペーター・リュームコルフの小著『民衆の富について』に出てくる台詞で、同書はこのような詩や伝承を民衆や子どもらの発話から蒐集したものである。ちなみに、カントの詩は「尊敬すべき人」を扱う章に掲載されている (Rühmkorf 2003, S. 217)。

もっとも、イマヌエル・カントは逆立ちなどできなかったし、少なくともできたという証拠はない。身体運動や遊戯は存在していたとはいえ、そもそも今日知られているようなトゥルネンやスポーツは18世紀にはまだ存在していなかった。この点については後に触れる。いずれにせよ、当時すでに著名であった若き哲学者イマヌエル・カントは、現代に至るまで私たちに多大な影響を与えている。西洋哲学史、科学史の歴史全体がカントに遡るだけでなく、近代の

自由主義国家や共同体の制度の本質的な特徴や構造にしても彼の思想に負うところが大きい (Willaschek 2023, S. 391/ 392)。たとえば、自由と責任、人権、人間の尊厳、民主主義、法の支配、憲法、国連などである。ロバート・マーソンの言葉を借りれば、カントは「我々がその肩の上に立っている巨人の一人である」 (Merton 2017, Original 1965)。

カントは教育や身体教育 (体育) だけではなく、トゥルネン、遊戯そしてスポーツなど、生活のほとんどすべての分野にその足跡を残している。

2024年は偉大な哲学者であり啓蒙思想家イマヌエル・カント (1724-1804) の記念すべき年である。彼は300年前の4月22日に東プロイセンのケーニヒスベルク (現在はロシア領カリーニングラード) で生まれた (訳注1)。カントの生誕記念は彼を偲び、彼と彼の哲学が今日も私たちに何を語りかけているのかを問う機会である。ゲーテは『新しい哲学者』の中で、誰が「最も優れている」と思うかというエッカーマンの質問に対し、次のように応答している。「カントはその教えが永続的な効果を持ち、我々の文化に最も深く浸透していることを証明した人物でもある。彼はまた、あなたが彼を読まなくても影響を

i ドイツ・ミュンスター大学教授

ii 立命館大学名誉教授

与えている。あなた方はもはや彼を必要としていない。なぜなら、あなた方はすでに彼が与えるものを手にしているのだから」。

もちろん、カントは逆立ちができなかったし、カントによる「体育」の指導案も現存していない。それゆえカントのテキストは「体育」授業の必読書ではない。

生誕記念の年にカントの著作の新版が数多く出版されている。マルクス・ヴィラシェクはカントの新しい伝記を執筆し、副題にある「思想の革命」を鮮やかに描きだし、カントが実践、開始した活動を論じている。「60分でわかるカント」などの講義がライブあるいはインターネットで行われている。イマヌエル・カントに関するポッドキャスト、とりわけ展覧会が巨匠の仕事と実像を解説している。『ランペと主人イマヌエル・カント』は、作家アンティエ・ヘルツォークがカントと使用人であり親友であったランペとの関係を描いたグラフィック・ノベルのタイトルである (Herzog 2017)。さらに、ポンの「国立美術館」では2023年11月から大規模なカント展が開催され、講演、セミナー、ディスカッションをともなって2024年3月17日まで観ることができた。

スポーツ、スポーツ教育そしてスポーツ科学全般を除けば、誰もカントのことを知っている。なぜそうなのかは、それ自体がトピックになるだろう。イマヌエル・カントと身体教育（体育）に関するこの論稿の目的は、私たちスポーツ関係者、スポーツ教師そして学術的・社会的存在としてのスポーツ科学もまた、この旧東プロイセン出身の小柄な男であり教授の「肩の上に立っている」ことを示すことにある。

「啓蒙とは人間が自ら招いた未成年状態から脱することである。未成年状態とは、他者に導かれることなく自分の理性を使う能力が欠如していることである。この未成年状態の原因が理性の欠如ではなく、他者に導かれずに自分の理性を使う決意と勇気の欠如にある場合、この未成年状態は自ら招いたものである。“Sapere aude!” (あえて賢かれ!) 自分の理

性を自分で用いる勇気を持つて!というのが啓蒙主義の標語である¹⁾」。

カントは人間であることの定義として自由と理性を重視した。彼は人間の知識の可能性と限界を明らかにし、私たちの行動を導く道徳的指針として「定言命法」を定立している。「普遍的な法則となるように、同時に意志することができる格言に従ってのみ行動せよ²⁾」。

カントと彼の「思想の革命」(ヴィラシェク)は教育学やスポーツ教育学においても確認することができるのである。

2. 教育学について

歴史教育学者ユルゲン・オーヴァーホフがカントの生誕記念とあわせ、カント研究者のマンフレッド・ガイヤーの序文を添えてカント『教育学講義』を再刊した(訳注2)。副題は「自由への指示」である(Kant 2024)。この副題は正鵠を得ている。なぜならば、カントによれば教育の目的は人間が理性を使えるようにすることであり、その自由を賢く使う過程で彼ら自身のため、そしてすべての人の進歩のため、最終的には人類のために支援することだからである。カントはコスモポリタンであり、彼の哲学的・教育学的著作は常にすべての人びとを対象としていた³⁾。

カントはケーニヒスベルクにおいて数学、自然科学から哲学そして今日「社会科学」と呼ばれる諸領域に至るまで、当時(そして一部は今日でも)関連性のあるほとんどすべてのテーマについて40年近くにわたって講義を行った。18世紀はケーニヒスベルクの教授たちが教育を含むさまざまなテーマで講義をしなければならなかった時代である。カントは「教育学について」という講義を4回行っている。カントが亡くなる前年の1803年、フリードリヒ・テオドル・リンクによって『講義』が出版された(Willaschek 2023, S. 76; Kant 2004)。このような経過もあり、カント自身によって書かれたものと聴衆や学生たちによって書き加えられたものとを明確に

区別することはできない。『教育学講義』は大きく2つの章に分かれている。第1章は「自然的教育について」、第2章は「実践的教育について」である。

独身だったカントは、自身を生活上の実践的な課題を含めて学生を教育することに努める教師、大学講師であると同時に、生活様式や教育に関する問題を理論的に扱う研究者あるいは科学者であると理解していた。カントが教授になる前は、同時代の多くの研究者と同じく、裕福な家庭での家庭教師として生計を立てていた。この点でカントは教師として、また教育者として実践的な教育経験を豊富に積んでいたのである。

カントにとって教育は理論的なものではなく、実践的なものであった。カントは子どもや若者の成長と発達に関して、人間全体という原則の中で実践的な課題、教育者への提言に関心を寄せていた。彼の教育理論はルソーと彼の教育小説『エミール』から大きな影響を受けており、カントはルソーを賞賛している。「ルソーは私を正しい方向に導いた」と彼は書き、ルソーを通して「人を敬う」こと、尊厳を認めること、人の価値を社会的地位や学歴によってではなく、「心の優しさと道徳的態度によって」評価することを学んだ。もっとも、おそらくルソーは「カントがすでに母親から学んでいたことを思い出させたにすぎない」だろうとヴィラシェクは指摘している (Willaschek 2023, S. 123)。

カントが教育理論を提供したと主張しなかったのは、哲学にとって決定的な重要性を持つ理論と実践をめぐる彼の理解と関係がある。「これは理論的には正しいかもしれないが、実践には適さない」。彼は1793年の著作の中で、この「よく言われること」について概説しているが、この点はカント哲学の中心の特徴の一つである「理論に対する実践の優位性」(Willaschek 2023, S. 24)、つまりカント自身が言うところの「純粋実践理性の優位性」に依拠している。カントはケーニヒスベルクの学生たちに、「私から哲学を学ぶのではなく、哲学するのだ」と語った (Willaschek 2023, S. 381)。要するに、学生たちはあ

らかじめ用意された思考パターンを使うのではなく、自分の頭で考えることを学ぶべきだということである。

カントにとって教育は実践的な行動の範疇にある。理論よりも実践が優先されるということは教育に関するいかなる理論も「実践的理性」を志向し、それに対して評価されなければならないということの意味している。カントにとって教育は芸術であり、統治と同様に難しく複雑なものであった。「人間の発明のうちで最も困難なものは2つあると考えられる。統治と教育である」(Kant 2024, S. 245)。「教育」とは人びとが「善のために才能を伸ばす」のを助けることである。しかし、これは何世代にもわたる終わりのない仕事である。「洞察力は教育に依存し、教育もまた洞察力に依存するからである。したがって、教育は徐々にしか進歩せず、ある世代がその経験と知識を次の世代に伝え、その世代がそれに何かを加えて次の世代に伝えることによるのみ、正しい教育の概念が生まれるのである」(Kant 2024, S. 245)。カントによれば教育とは個人だけでなく、国家と社会ひいては人類全体に関わるものであった。理性の発達という点でも、道徳や倫理の発達という点でも、教育によってのみ人類はさらに発展することができるのである。「前の世代の知識を備えた各世代は、人間のすべての天賦の才能と比例して適切に発達させるような教育をますますもたらすことができる」(Kant 2024, S. 244)。

「実践的理性」の優位性にもかかわらずカントの意味での教育的実践は理論によって、すなわちカントの人間観と1765年の論理学の講義で定式化した哲学の4大疑問に対する彼の応答に方向づけられていた。「私は何を知りうるのか？私は何をなすべきか？私は何を望むことができるか？人間とは何か？」。

最初の3つの問いは最後の問いに収斂する。「人間とは何か？」彼はその答えを『人間学』の中で述べている。1784年に出版された『世界市民的な見地における普遍史の理念』の第6編に、「人間のような曲がった木からは、完全にまっすぐなものではない」

と叙述している。

別言すれば、カントは幻想を抱かなかった。人間は複雑であり、善であると同時に悪であり、利己的であると同時に利他的であり、排他的であると同時に寛大であり、攻撃的であると同時に温和である。しかし、動物との大きな違いは「理性」があることである。つまり、望むと望まざるとにかかわらず、自由に決定し行動することができるし、そうしなければならない。人間には「自由意志」があり自分の行動に責任を持たなければならない。理性は人びとが平和に共存したいのであれば、自らを抑制し、「野性」を律し、コントロールしなければならないことを教えてくれる。この責任を負うために、人びとは自然から与えられた理性の力を行使し、活用することを学ばなければならない。自由は理性の発達と開花のための前提条件である。カントは『人倫の形而上学の基礎づけ』の中で、これは人間の唯一のア priori な権利であると書いている (Willaschek 2023, S.186)。それは「人間性によって」すべての人間に生まれながらにして与えられ、不可分のものである。ただし、それが他者の自由と両立する限りにおいてである。したがって、自由と理性は相互に関連しており、子どもの頃から学びそして実践しなければならない。

カントは一面で教育が自由と発達に向けた唯一の道であることを認めていたが、教育過程は複雑な文脈の中で行われる。人間は働かなければならない唯一の動物である。ルソーが言うように、人間は生まれながらにして自由なのだから教育されなければならない。したがって、教育とは規律と強制も必要とする。「教育の最大の問題のひとつは法的強制への服従と、自分の自由を活用する能力とをいかに結びつけるかということである。強制は必要だからだ！強制に直面したとき、どうやって自由を生み出せばよいのだろうか？私は生徒が自由を強制されることに耐えられるように慣らすと同時に、生徒が自由をうまく活用できるように指導しなければならない」(Kant 2024, S. 49)。「しつけや訓練は、野性を人間

性に変えるのである」(Kant 2024, S. 239)。

具体的にカントは『教育学講義』の中で、教育の段階でもあるところの4つの教育目標を挙げている：しつけ、教養、文明化、道德化である。「しつけ」とは「人間の野性を手なずける」こと、「教養」とは「技能の習得」を意味し、「文明化」とは個人が「人間社会にどのように適合するか」の過程を表し、「道德化」とは人が「善い目的だけを選択するという態度を身につける」ことを意味する (Kant 2024, S. 249)。

それゆえ、啓蒙主義とカントの「定言命法」の意味での理性の行使は、知識や能力だけでなく、むしろ人格と態度において、困難な状況においてもそれを維持する勇気や意志に依存する。しかし、この道德的態度や人格形成は、しつけ、教養、文明化という教育過程の他の3つの特徴と結びついており、それに基づいている。

カントが強調した教育の目的は個人の「幸福」や「福利」に寄与することではなく、経済的、文化的そして倫理的、道德的な観点から人類の進歩に貢献することであった。「理性」の発達はそのような進歩を達成するための手段である。「このような人間の営みの中で、人間には数多の苦難が待ち受けている。しかし、自然は人間がここでよく生きることではなく、人間が、その行動によって生命と幸福に値するように自らを前進させることに、まったく関心がなかったようだ。古い世代は来るべき世代のために、つまり自然が意図した文化と文明の仕事をその世代が継続できるような基盤を用意するために労苦をともなう仕事をしているようにしか見えないこと、そして直近の世代だけが、彼らの祖先の長い家系が（意図的でなかったことは認めるが）取り組んだ建物の中で、彼らが準備した幸福を分かち合うことなく、幸運にも生活することができること⁴⁾」「教育によってのみ『人間性の完成』がなされるのである」「人間性が教育によってよりよく発達し、人類にふさわしい形に形成されることを想像するのは楽しいことである。このことは未来の人類がより幸福になるという

展望をわれわれに開くものである」(Kant 2024, S. 242/243)。

カントはルソーを熱狂的に支持した。ルソーの小説『エミール』を手にしたとき、彼はその読書に熱中し、この作品を読むために数日間、日々の散歩を断念したと言われている。その結果、カントの教育学に関する著作にはルソーへの言及が数多く見られる。ルソーと同様、カントも子どもたちに新鮮な空気の中でゲームや体操をさせ、身体に関する実践的で感覚的な経験をさせることを奨励している。あらゆる種類の遊戯、身体運動、入浴、水泳などである。新鮮な経験によってのみ、実践的な理性が形成される。概念が生命と経験で満たされるからである。「内容なき思考は空虚であり、概念なき見解は盲目である」とは、カントの『純粹理性批判』からの引用である (Willaschek 2023, S.302)。

3. スポーツ教育学におけるカントの受容—概説

このカントの言葉は1793年に出版されたヨハン・クリストフ・フリードリヒ・ゲーツムーツの『青少年の体育』でも引用されている (訳注3)。「『概念なき見解は盲目である』とカントはどこかで言っているが、知なき概念はいわば聴覚障害者である。したがって人間の精神構造はまず知を求め、次に概念を求めるのである」とゲーツムーツは自身の身体教育論について語っている (Guts Muths 1928, S. 493)。カントと同様にゲーツムーツは認知的、理性的そして道徳的な教育の基礎とし実践的で感覚的な経験を重視した。ゲーツムーツはカントの『純粹理性批判』すべてを読んだわけではなく、「どこかで」聞いただけだったようだが、カントの認識論はすでに広く知られていたもので、教養のある人なら誰でもゲーツムーツのようにこの文章に共感できたのである。そして、カントもゲーツムーツの『青少年の体育』をまったく知らずに教育学の講義を行っていた。

ゲーツムーツは近代スポーツ教育の父と称されている (Krüger 2019, S.138/139)。彼は教育学的な身

体教育に関する最初のテキストを書いた。カントと同様にゲーツムーツはルソーに言及し、実践的で感覚的な経験を通じた自由な教育を評価している。ルソーやカントと同じく彼は「早熟化」に反対し、子どもに適した教育と指導を支持し、また子どもを「あまやかす」ことを嫌い、かわりに自由な遊びを通じた自己活動を奨励した。身体教育の目的は子どもの自然な力を発達させ、理性と自由を活用し、自由な社会で啓発された責任ある市民になることである。そのためには「強制」や「しつけ」も必要だが、「あまやかす」は必要ない。ただし、教育方法において「強制」は避けられないと考えたカントとは対照的に、ゲーツムーツは教育方法としての「強制」を否定している。「身体的訓練における大原則は強制しないことである。強制では何も達成できない」と明言し、むしろ、生徒の向上心ひいてはよりよい成績を促すために、他の方法を選択すべきだと論じている (Guts Muths 1928, S. 505)。しかし、カントと同様にゲーツムーツも身体的なパフォーマンス、運動技能や能力そして認知的、社会的、道徳的、すなわち人格的能力など、あらゆる面で生徒のパフォーマンスを向上させることに関心を寄せていた。

カントは著作の中でゲーツムーツについて触れていない。しかし、カントはもう一人の汎愛主義的教育者、デッサウの汎愛主義学院の学院長ヨハン・ベルンハルト・バゼドウを高く評価した (Overhoff 2020)。カントはこの教育改革学派に注目し、バゼドウやヨハン・ハインリヒ・カンベなどの思想家たちと書簡を通じて交流していた (Kant 2024, S.27-32)。カントはデッサウの汎愛主義者学校での教育、とりわけ身体運動を模範的、進歩的、将来を展望したものと理解していたのである。

ゲーツムーツは明確にカントに言及していないが、バゼドウとゲーツムーツは別の点でカント学派であった。カントのように彼らは身体教育や「体育」を含むあらゆる教育の有用性と利便性を強調した。しかし、ゲーツムーツが適切な仕事、身体運動、遊戯などを通じて若者がその後の人生や職業に備えるべ

きであるとしたのに対し、カントの「有用性」と「目的」は、より深い意味でその人自身に向けられたものであった。教育の意味と目的は人間そのものであり、自由な理性的存在になるための教育と訓練である。それは教育の客体ではなく主体なのである。このカント的原理は自由主義国家の法的理解にも浸透している。そこでは人びとは国家や他の制度、あるいは他の人びとが処理できる対象としてではなく(そうであってはならない)、政治的、社会的、経済的行為の意味と目的たる主体として見なされるのである。

ゲーツムーツもカントの理論と啓蒙主義を踏襲しており、彼の『青少年の体育』は国際的な拡がりを可能にするものであった。それはすべての若者を対象としたものであり、後のドイツトゥルネンのようにドイツ人青年のみを対象としたものではなかった。

フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーンとトゥルネン運動によって、身体教育の啓蒙的なコスモポリタンの志向は国民的あるいは国家的なロマン主義的視点へと転換した。カントのかわりに哲学者ヨハン・ゴットリープ・フィヒテが国民教育思想の拠り所となった。トゥルネンの父と呼ばれるヤーンは、学生時代にフィヒテの『ドイツ国民へ告ぐ』を聞き、その一言一句に注目している。カントのコスモポリタンで批判的な合理主義ではなく、ナショナリズムと観念論が当時の指導的なイデオロギーであり哲学となったのである (Krüger 2019, S.146-150)。

その結果、トゥルネンの思想家たちがカントを受け入れることはほとんどなくなってしまった。加えて、ドイツにおける体育とスポーツのナショナリズム的な狭小化は、ドイツの文化や身体文化、なかでもトゥルネンが国際的な観点からほとんど認知されないことを意味したのである。

しかし、「組織化された社会的ナショナリズム」(Düding 1984)としての理想主義的で民族ロマン主義的なトゥルネン運動に加え、いわゆる「トゥルネン禁止令」(訳注4)が解かれた後の19世紀、プロイセンひいてはドイツ連邦他の州でも義務教育とし

ての「体育」が導入されていく。この学校での「体育」の義務化は、身体教育をしつづけるための不可欠な手段とみなしたという点でカント的思考の影響を感じさせる。学校での「体育」義務化にしても、何よりもこの目的を果たすためのものだった。カントが求めた自由と強制のバランスは、後者の方向へとシフトした。この身体的規律が自由を促進したのか、それとも「理性」や啓蒙的な合理的思考、成熟、悟性の向上に寄与したのかは疑問である。カント自身が義務教育に賛成したのは、「野性」を手なずけるために必要と理解していたからだが、同時に近代的で啓蒙的な社会における公平かつ公正な機会を保障するためでもあった。カントが身体教育(体育)を義務教育として位置づけていたかどうかはわからない。おそらくそう考えていなかったか、あるいは幼少期だけに必要と見なしていたと思われる。他方で、教養、文明そして何よりも道徳といった他の教育的要素は年齢があがるにつれて、より重視されるようになる。

トゥルネン運動と汎愛主義の歴史家であるカール・ヴァスマンスドルフは、1864年の『新体育年報』に「哲学者カント」についてと題し、カントが著作でバゼドウに言及していたと書いている。しかし、それ以外の点で、彼はカントが身体教育(体育)にとって大きな意味を持つとは考えていなかった(Wassmannsdorff 1864)。オイラーの『体育史』の中でカントは言及されているが、彼は1803年からの「体育」に関する彼の発言に言及するだけで、カントの哲学に分類したり、責任ある自由な市民になるための教育における役割について論じたり、コメントはしていない (Euler 1891年, S. 76/77)。

もう一人のトゥルネン史家であり体育関係者でもあったエドムント・ノイェンドルフは、『新ドイツ体育史』の中で、カントの「全体として狭い功利主義的合理主義」(Neuendorff 1931, S.111/112)を批判している。ノイェンドルフはこの合理主義は克服されたと考え、ニーチェ哲学の精神に則り、フィヒテの観念論と国民的ロマン主義者アルントとヤーンに

焦点を当てた。

カントは忘却の彼方に去り、歴史化された。彼の教育論の哲学的基礎は、発展途上の身体教育(体育)理論ではもはや認識されなかった。第三帝国と第二次世界大戦の大惨事が終わりをづけ、ドイツ連邦共和国において身体教育の新たな人間学的正当化の文脈で再びカントが参照されるようになった。オモー・グルーベらによって人間学的に創始されたスポーツ教育学は、カント的あるいは新カント的な人間観と学問理解に基づいている。スポーツに関する知識人として、グルーベ自身はカント的な義務と活動の倫理観に傾倒していく(Krüger 2015, 2023)。これは、カントが明確に引用されることはなくても、スポーツ教育やスポーツ科学におけるグルーベの研究に示されている。「教育理論」と呼ばれる体育そしてスポーツの教育学の中心に位置づけるのはスポーツをする主体としての人間であり、アスリートまた市民として、自己決定的、自由かつ合理的な行動を目指して教育されるべき若者、子どもたちである(Krüger 2020)。スポーツでは自由で民主的な社会で責任と義務を果たせる「責任あるアスリート」が育成されるべきである。スポーツ教育は「純粹実践理性」の原則に基づく科学であり、抽象的な理論ではない。スポーツ教師とスポーツ組織の行動は、若者とアスリートに対する義務と責任によって特徴づけられるべきである(Grupe 1969; Kurz 1990, Meinberg 1991)。この概念は、たとえば子どもたちの競技スポーツやハイパフォーマンス・スポーツをめぐる問題や課題で明らかになる(Court 1989, S. 247-254)。

ユルゲン・コートは「遊びとスポーツの理論と実践に対するカントの貢献」という論文(1988年)の中で、近代的な体育・スポーツ理論の発展におけるカントの哲学と教育学の意義を明らかにしようと試みた。彼の説明の中心はカントの人間学と理論と実践の関係である(Court 1989, bes. S. 192-250)。

インゴ・マルターラーによる最近の論文では、カントの哲学と人間学の中心的概念である「義務」に

ついて言及されている。近代社会およびポストモダン社会において、この概念はスポーツや必修科目の文脈でより重要な意味を持つようになった。定期的にスポーツに参加することで健康を増進し、連帯感や相互作用における公正さといったコミュニティ形成の美德を含め、近代的な自由主義社会で必要とされるその他の美德を促進することが市民の義務であると考えられるようになったからである(Marthaler 2014)。学校のスポーツは必修科目であるにもかかわらず、カントの中心的な側面である「義務」は最近の学校のスポーツや体育の教育学では過小評価される傾向にある。楽しみやゲーム、健康や幸福に焦点が当てられているが、「義務」はあまりフォーカスされていない。カントにとって自由と強制、義務と選択は対立するものではなく、「自由への導き」というコインの裏表であった(Kant 2024)。

4. スポーツとスポーツ教育学におけるカントの意義—展望

スポーツが学校教育の必修科目であることもカントと関係がある。カントによれば人間は生まれながらにして自由であり理性を備えているのだから教育を受けなければならない。このような人間の本性を代表する国家や共同体は、結果として自由で民主的な立憲国家での生活を可能にするために、その教育に責任を負う義務がある。身体教育は教育全般に不可欠なものであるため、体育、ゲーム、スポーツも義務教育のテーマであり、科目であることは強制ではないが有益である。これらは「自由への導き」(Kant 2024)の一部である。

しかし、自由と理性は、他人の自由が損なわれない限り、人びとが自分の生き方を自由に決められるよう促す。すなわち、自由とは恣意性ではなく、義務や責任を意味するのである。自由な人間であれば、学校や市民としての義務とは別にスポーツをするかどうかを自分で決めることができるのである。

国際オリンピック委員会 (IOC) はオリンピック

憲章の中で、スポーツを人権と謳っているが (IOC)、この人権そして人間の尊厳はイマヌエル・カントの哲学に直結する概念である (訳注5)。しかし、スポーツにおける人権とは、スポーツに参加しなければならないという権利ではなく、スポーツに参加する機会を人々に提供する国家やコミュニティの義務を意味している (Krüger 2016)。

自由、理性、定言命法はハイパフォーマンス・スポーツやエリート・スポーツに携わるアスリート、とりわけ教育的なコンテキストで子どもや若者と接する際の指針、原則でもある。カント的な意味での基準は、スポーツにおける個人の尊厳でなければならない。「責任あるアスリート」は、競技スポーツの教育学的指導原理に依拠してはならない (Fischer 2017)。カントに則るなら、アスリートはスポーツの主体であり、メダルや名声や名誉、金銭や権力を得るための手段ではない (Court 1989, bes. S. 247-254)。

フェアネスとフェアプレーはスポーツの用語であり、日常用語の一部となっている。相互に合意されたルールのもと、「適正な」人びとの間で公正な競争が行われることを表している。誰もが同じように勝つチャンスがあること、ルールを守ることに加え、フェアネスは相互承認と尊敬に基づいている。カントはフェアプレーという言葉を知らなかったが、「野性」を手なずけることを学んだ理性的な人びとによって争われる、平等で公平な条件下での公正な競争という考え方はカントに遡ると言えよう。公正と正義をめぐる倫理的・道徳的問題はスポーツ哲学やスポーツ倫理の分野でも、とりわけカント研究者のフォルカー・ゲルハルトによって、カントを参照しながら分析されてきた (Gerhardt 1991, 1995)。哲学者ジョン・ロールズは、このカントの考えをさらに発展させ、啓蒙され、責任感があり、自由な人びとが平等の機会を享受する公平で公正な社会という理論を提唱した⁵⁾。

オリンピック憲章にはスポーツはより平和な世界に貢献することができ、また貢献したいと記されて

いる。この平和の理念は19世紀末にピエール・ド・クーベルタンが提唱し、1935年のラジオ演説 (Coubertin 1935) からもうかがえるように、当初から近代オリंपイズムの一部であった。これはカントが『永遠平和のために』 (Kant 2022) で定式化したことと同様の人間性の理解に基づいている。すなわち、人間の進歩、安全そして自由による平和は、人びとが自分の「野性」を手なずけることを学び、お互いを知り、認め合い、自分たちで作ったルールを守り、互いを公平に扱うことによって可能となるのである⁶⁾。

カントは近代オリंपックのことを何も知らなかったが、後にアメリカのウィルソン大統領の14か条の平和原則、そして第1次世界大戦後の最終的な国際連盟の創設につながった彼の構想は、IOCの平和思想にも見出すことができるのであり、第2次世界大戦後の国際連合ひいては国際司法裁判所の創設にしても、カントの『永遠平和のために』に遡ることができるのである (Gerhardt 2023)。

「平和、民主主義、法の支配、人間の尊厳が、多くの人びとにとって自身の社会を導く価値としての自明の妥当性を失い、これらの価値が脅威にさらされている今 [...]」、ウィラシェク (Willaschek 2023, S. 392) は、その優れたカント伝の最後にこう書いている。カントの深遠で人道的な思考法、人間の本性についての冷静な知識、そして無条件の道徳的基準は、今日でも私たちに指針を与えてくれるだろう。

注

- 1) イマヌエル・カント「啓蒙とは何か」という問いへの応答 (ケーニヒスベルク, 1784年9月30日)。
- 2) イマヌエル・カント『人倫の形而上学の基礎づけ』(ゲーテンベルグ・プロジェクトでのデジタル化)。
- 3) カントの著作にある人種差別的、性差別的な記述について現在議論されているにもかかわらず、これは正当な評価である。Willaschek 2023, S. 209-220参照。
- 4) カント「コスモポリタンの意図をもつ通史の構

想」第3文, 引用は Kant (2004), S.155。

- 5) グルーベ編『スポーツ倫理事典』(1998年)に掲載されている諸論文参照。
- 6) スポーツと平和(そして戦争)の関係については, Krüger 2022を参照。

<訳注>

1. ケーニヒスベルクはドイツ東部の辺境にある都市だが, カントが生涯にわたり活動した啓蒙都市としても知られている。この点に関してはエンゲルハルト・ヴァイグル『啓蒙の都市周遊』(三島憲一・宮田敦子訳)岩波書店, 1997年, 第5章参照。
2. 『教育学講義』は伊勢田耀子らによって翻訳されている。イマヌエル・カント『教育学講義他』(世界教育学選集, 60)(勝田守一, 伊勢田耀子訳)明治図書, 1975年。
3. 『青少年の体育』は成田十次郎によって翻訳されている。グーツムーツ『青少年の体育』(世界教育学選集, 91)(成田十次郎訳)明治図書, 1979年。
4. 「トゥルネン禁止」(Turnsperre)はナショナリズムに傾斜したブルシェンシャフトなどの自由主義的な運動を制圧する中で1820年に発令されたものであり, 前年にヤーンは逮捕されている。その際「カールスバートの決議」(1819年9月)がトゥルネン運動に与えた影響は大きい。有賀郁敏「ドイツ初期トゥルネン協会運動における結社の自由をめぐる問題—結社, 法制度, 社会的自己調整メカニズム—」阿部生雄監修『体育・スポーツの近現代—歴史からの問いかけ—』不味堂出版, 2011年, 501-521頁。
5. 「オリンピック憲章」には7つの根本原則が記されており, その第1項目は以下のとおりである。「オリニズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め, バランスよく結合させる生き方の哲学である。オリニズムはスポーツを文化, 教育と融合させ, 生き方の創造を探求するものである。その生き方は努力する喜び, 良い模範であることの教育的価値, 社会的な責任, さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とする」。この文章からは, 啓蒙と理性を踏まえたカントならびに人間学的な教育を重視したグルーベの身体教育思想を「オリンピック憲章」と繋げようとするクリューガーの

意図が見えてくる。https://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2021.pdf (最終閲覧日: 2024年7月5日)

<文献>

- ・Coubertin, Pierre de ([1935]): Pax Olympica. Weltsendung des Reichssenders Berlin am Sonntag, den 4. August 1935 mittags. [Vorolympische Kampagne in drei Sprachen]. Unter Mitarbeit von Pierre de Coubertin und Carl Diem. Berlin-Charlottenburg: Organisationskomitee für die XI. Olympiade Berlin 1936 e.V.
- ・Court, Jürgen (1989): Kants Beitrag zur Theorie und Praxis von Spiel und Sport. Zugl.: Köln, Dt. Sporthochsch., Diss., 1988. Academia-Verl. Richarz, Sankt Augustin.
- ・Düding, Dieter (1984): *Organisierter gesellschaftlicher Nationalismus in Deutschland (1808-1847)*. Zugl.: Köln, Univ., Habil.-Schr., 1981. Oldenbourg, München, Wien.
- ・Euler, Carl (1891): *Geschichte des Turnunterrichts (Geschichte der Methodik des deutschen Volksunterrichts)*. Fünfter Band, Gotha: Thiemanns Hofbuchhandlung.
- ・Fischer, Christoph (2017): Der mündige Athlet und das Recht auf Selbstbestimmung. In: *Olympisches Feuer* (1), S. 19.
- ・Gerhardt, Volker (1991): Die Moral des Sports. In: *Sportwissenschaft* 1991 (2), S. 125-145.
- ・Gerhardt, Volker (Hg.) (1995): *Fairness und Fair play. Eine Ringvorlesung an der Deutschen Sporthochschule Köln*. Deutsche Sporthochschule Köln. 2., unveränd. Aufl. Sankt Augustin: Academia-Verl.
- ・Gerhardt, Volker (2023): *Immanuel Kants Entwurf "Zum Ewigen Frieden". Eine Theorie der Politik*. 2., erweiterte Auflage. Darmstadt: wbg Academic.
- ・Grupe, Ommo (1969): *Grundlagen der Sportpädagogik*. Anthropol.-didakt. Untersuchgn. München: J. A. Barth ((Wissenschaftliche Schriftenreihe d. Deutschen Sportbundes, Bd 8)).
- ・Grupe, Ommo (Hg.) (1998): *Lexikon der Ethik im*

- Sport. Bundesinstitut für Sportwissenschaft. 1. Aufl.* Schorndorf: Hofmann (Schriftenreihe des Bundesinstituts für Sportwissenschaft, 99).
- Guts Muths, Johann Christoph Friedrich (1928): *Gymnastik für die Jugend. Enthaltend eine praktische Anweisung zu Leibesübungen. Ein Beytrag zur nöthigsten Verbesserung der körperlichen Erziehung. Nach der Originalausg. von 1793.* Dresden: Limpert (Quellenbücher der Leibesübungen, 1). Online verfügbar unter <http://digital.slub-dresden.de/id490439470>.
 - Herzog, Antje (2017): *Lampe und sein Meister Immanuel Kant. Eine graphic novel. 1. Auflage, Lizenzausgabe für die Edition Büchergilde GmbH.* Frankfurt am Main: Edition Büchergilde.
 - IOC: Olympic charter. Online verfügbar unter <https://stillmedab.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/General/EN-Olympic-Charter.pdf>, zuletzt geprüft am 10.01.2024.
 - Kant, Immanuel: Beantwortung der Frage Was ist Aufklärung. Königsberg in Preußen, den 30. Septemb. 1784. Online verfügbar unter <https://www.projekt-gutenberg.org/kant/aufklae/aufkl001.html>.
 - Kant, Immanuel: Grundlegung zur Metaphysik der Sitten (1785). Online verfügbar unter <https://www.projekt-gutenberg.org/kant/sitte/chap004.html>.
 - Kant, Immanuel (2022): *Zum ewigen Frieden. Ein philosophischer Entwurf. Durchgesehene und bibliographisch ergänzte Auflage.* Ditzingen: Reclam (Reclams Universal-Bibliothek, Nr. 14382).
 - Kant, Immanuel (2024): *Über Pädagogik. Anleitung zur Freiheit. Unter Mitarbeit von Jürgen Overhoff und Manfred Geier.* 1st ed. Stuttgart: Klett-Cotta. Online verfügbar unter <https://ebookcentral.proquest.com/lib/kxp/detail.action?docID=7385963>.
 - Krüger, Michael (2015): Ommo Grupe und seine Vision des Sports. In: *Sportwiss* 45 (2), S. 55–56. DOI: 10.1007/s12662-015-0365-0.
 - Krüger, Michael (2016): Turnen und Sport zwischen Menschenrecht, Freiheit und Zwang. Ein Essay aus historisch-sportpädagogischer Perspektive. In: *Zeitschrift für Menschenrechte (Wochenschau Verlag)* (2), S. 7–25.
 - Krüger, Michael (2019): *Einführung in die Sportpädagogik. 4., überarbeitete und aktualisierte Auflage.* Schorndorf: Hofmann (Sport und Sportunterricht, Band 6). Online verfügbar unter <http://www.blickinsbuch.de/item/07f4b0be3fa6bf7772ff1329db6d3da8>.
 - Krüger, Michael (2020): Menschenbilder im Sport. In: Michael Zichy (Hg.): *Handbuch Menschenbilder.* Wiesbaden: Springer Fachmedien Wiesbaden, 1–20 (S. 517–536).
 - Krüger, Michael (2022): Sport, Krieg und Frieden. In: *Sport und Gesellschaft* 19 (2), S. 245–252. DOI: 10.1515/sug-2022-0019.
 - Krüger, Michael (2023): Ommo Grupe - Nestor der Sportpädagogik und Sportwissenschaft. In: *Gelebte Sportpädagogik.* Hamburg: Feldhaus, Edition Czwalina, 2023.
 - Kurz, Dietrich (1990): *Elemente des Schulsports. Grundlagen einer pragmatischen Fachdidaktik.* Zugl.: Tübingen, Univ., Habil.-Schr., 1977. 3., unveränd. Aufl. Schorndorf: Verlag Karl Hofmann (Reihe Sportwissenschaft, 8).
 - Marthaler, Ingo (2014): Sport ist Pflicht. In: *Sportwiss* 44 (4), S. 195–202. DOI: 10.1007/s12662-014-0348-6.
 - Meinberg, Eckhard (1991): *Hauptprobleme der Sportpädagogik. Eine Einführung.* 2., aktualisierte Aufl. Darmstadt: Wiss. Buchges., [Abt. Verl.] (Die Erziehungswissenschaft).
 - Merton, Robert King (2017 (Original 1965)): *Auf den Schultern von Riesen. Ein Leitfaden durch das Labyrinth der Gelehrsamkeit.* 5. Auflage. Frankfurt am Main: Suhrkamp (Suhrkamp-Taschenbuch Wissenschaft, 426).
 - Neuendorff, Edmund (1931): *Geschichte der neueren deutschen Leibesübungen von Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart.* Band I Geschichte der deutschen Leibesübung vom Beginn des 18. Jahrhunderts bis zu Jahn. Dresden, Berlin:

Limpert.

- Overhoff, Jürgen (2020): *Johann Bernhard Basedow. (1724–1790) : Aufklärer, Pädagoge, Menschenfreund : eine Biografie*. Göttingen: Wallstein Verlag (Hamburgische Lebensbilder, Band 25).
- Rühmkorf, Peter (2023): *Sämtliche Werke. Oevelgönner Ausgabe*. Abt. 1: Das literarische Werk, Band 9: Essays und Monographien 1: Schriften zur Poetik (1953–1967). Unter Mitarbeit von Hans-Edwin Friedrich. Göttingen: Wallstein Verlag (Peter · Rühmkorf. Sämtliche Werke. Oevelgönner Ausgabe). Online verfügbar unter <https://ebookcentral.proquest.com/lib/kxp/detail.action?docID=7252782>.
- Wassmannsdorff, Karl (1864): Der Philosoph Kant über die Leibesübungen. In: *Neue Jahrbücher für die Leibesübungen* 10, S. 202–205.
- Willaschek, Marcus (2023): Kant. *Die Revolution des Denkens. Originalausgabe*. München: C.H.Beck. Online verfügbar unter <https://www.perlentaucher.de/buch/marcus-willaschek/kant.html>.

Translation

Immanuel Kant – On (physical) education

Michael Krügerⁱ

Abstract : The 300th anniversary of the birth of the philosopher Immanuel Kant (1724-1803) offers an opportunity to discuss the relevance of his philosophy for the theory and practice of education in general and physical education in particular. The first part of the article provides an overview of the current reception of Kant's work in Germany and abroad. The second part deals with Kant's work 'On Education', which was first published after his death in 1803. The third and fourth part discusses the reception of Kant's philosophy in and for physical education and sport pedagogy from its beginnings in the Age of Enlightenment to the present day.

Keywords : Kant, education, physical education, reason, critique of reason

i Professor, University of Münster, Germany